

源氏物語における〈語り〉の機能序説

豊 島 秀 範

「書く」という行為が、書き手のはげしい意志表示であることは、言をまたない。同時に、「書く」ことは書き手の価値観の表明である。その多くは、マイナスのイメージとして意識されている書き手の立場や現象を、プラスの方向へと移行させることを目指した行為であることも、古代の物語や日記作品に共通して認められる。それは、古代から現代に至るいつの時代においても、同じであるに違いない。

ところで、やや唐突な事例ではあるが、『東日流外三郡誌』について触れてみよう。昭和五〇年から五二年にかけて、青森県市浦村の『市浦村史資料編』（全三巻）の中に、津軽の古代史の資料として『東日流外三郡誌』の一部が刊行され、人々を驚かせた。次いで、昭和五八年から六〇年に渡って二百巻に及ぶ膨大な『東日流外三郡誌』のすべてが出版された。

そこに記述されている津軽古代史の骨子を要約すると、以下のごとくである。

東日流（津軽）の先住民はアソベ族といい、東日流がまだ大陸と陸続きであった太古に、彼方の大陸から渡ってきた、比較的平和を好む民であった。その後、火山の噴火が起こり、また、新たに移住してきた気性の荒いツボケ族という騎馬民族に、アソベ族は滅ぼされた。この頃は、大陸からすでに相当多くの漂着民が東日流には住み着いていた。他方、大和の地では、五畿七

道を統一した耶馬台国王・安日彦と、その弟の副王・長髓彦は、築紫より攻め上ってきた日向族と攻防を続けていたが、出雲族および南海道の耶馬台軍の裏切りと、長髓彦の娘婿の穰速日命の裏切りにあい、耶馬台国は敗戦した。傷を負った長髓彦は、安日彦とともに一族を率いて東日流へと落ちのびて来た。長髓彦を初めとする耶馬台族は、既に東日流に住んでいた晋の君子一族の支援を受けて、先住民のツボケ族を制圧し、諸族を連合し、荒吐族と称して、東北一帯を鎮圧した。

東日流（津軽）の先住民であったというアソベ族・ツボケ族の存在、さらには、大和を統一した安日彦が、弟の長髓彦とともに東日流に落ちのびて東北一帯を支配するという壮大な物語である。もとより、これを裏付ける資料はほかにない。歴史研究者からは信憑性のないものとして扱われている書物である。それは一瞥して明らかだ。にもかかわらず、どうしてこのような膨大な記述がなされたのであろうか。

そもそも、この『東日流外三郡誌』なる書物は、寛政元年（一七八九）に、安東氏ゆかりの秋田孝季と、その妹の夫・和田長三郎の二人が、安東氏累代の来歴を調査・記録しようと思ひ立ち、三〇数年を要して全国をまわって調べたものだという。江戸時代の後期に、遙か古代の記録が残されていた筈もない。「東日流語部の語伝板木に曰く」「語部とて、現世に到りてかたくなにも絶やさざる帯川の作太郎曰く」（第一巻「阿蘇辺族伝話」）など、〈語り〉の存在が頻繁に記述さ

れているのだが、無論、超古代にかかわる歴史を語り伝える語部がいて、それを伝承していたなどと言える質のものでもない。いわば古代東日流の幻想世界である。

従来の国史では、『日本書紀』の景行天皇一十七年二月の条に、「武内宿禰、東国より還^{かへりまゐ}て奏^{もう}して言^{まう}さく、『東^{あづま}の夷^{ひな}の中に、日高見^{ひたかみ}国有^{あり}。其^{その}の国^{くに}の人^{ひと}、男^{おとこ}女^{めづ}並^{ならび}に椎^こ結^{むす}け身^みを文^{もん}けて、為人^{ひと}勇^{ゆう}み悍^{かん}し。是^{これ}を総^{すべ}て蝦夷^{えみい}と曰^いう。亦^{また}土地^ち沃^{わく}壤^{りやう}えて曠^{ひら}し。撃^うちて取^とりつべし』とまうす」（注一）と記されているのが、蝦夷の記述としての最初である。以後、景行天皇四〇年七月「朕聞^{われきこ}く、其^{その}の東^{あづま}の夷^{ひな}は、識^し性^{しやう}暴^{ぼう}び強^{きやう}し。……往^{むかし}古^こより以^{もつ}来^{きた}。未^いだ王^{わう}化^けに染^{せん}はず」と、勇猛な蝦夷の人々に注目し、その実態をかなり細かく記すこととなる。続いて、齐明天皇元年（六五五）七月「柵^{さく}養^{やう}の蝦夷^{えみい}九人、津刈^{つぎ}の蝦夷^{えみい}六人に、冠^{かん}各^{かく}二階^{かい}授^{さづ}く」、齐明天皇四年（六五八）四月「阿部臣^{あべの}（名^なを闕^{くわ}せり）船師^{ふねし}一百八十艘^{さう}を率^{りつ}て、蝦夷^{えみい}を伐^きつ。……恩^{おん}荷^かに授^{さづ}くるに、小乙^{せうおつ}上^{かみ}を以^{もつ}てして、淳代^{じゆん}・津輕^{つるが}、二郡^{ふたぐん}の郡領^{ぐんりやう}に定^{さだ}む。遂^{すなは}に有間^{うま}浜^{はま}に、渡嶋^{わたしま}の蝦夷^{えみい}等^らを召^よし聚^{あは}へて、大^{おほ}きに饗^{あは}たまひて帰^{かへ}す」など、ついに阿倍比羅夫が蝦夷討伐に乗り出すのであるが、その実態は、饗応と官位の贈与とによる和平工作であった。日本史のテキストに記されているような平定などは、とても不可能なことであったのだが、この時に渡嶋（北海道）の蝦夷とも交渉をもっていることは注目される。こうした記事は、齐明天皇四年七月、同五年三月・七月、同六年三月・五月と続き、記録の量もかなりにのぼる。大化の改新以後、律令体制を整えようとする齐明天皇にとって、蝦夷がどれほど大きな存在であったかを物語るものである。それから約一五〇年後の延暦二〇年に、坂上田村麻呂に蝦夷は敗れるが、それとて現在の盛岡以北には十分な統制は及ばなかったようだ。こうした正史に記述された歴史的な記録によって、さらには青森県を中心とする東北北部に縄文・弥生時代の遺跡が集中しており、遮光器土偶や、漆塗りの藍胎土偶の出土、稲作技術や、結合式釣針にみられる進んだ漁労技術など、当時としてはかなり高度な技術文化の実態が明らかになりつつある最近の考古学の成果などからして、『東日流外三郡誌』の著者が、でっちあげを承知で幻想した東日

流の古代国家なるものも、それなりの手がかりはあったわけである。しかし、ここでの問題は、東日流の古代国家の存否にあるのではない。二百巻にも及ぶ『東日流外三郡誌』を執筆した著者のエネルギーであり、そのエネルギーの噴出を支えた激しい心の高まりに注目したいのである。松田弘洲氏は言う、「外三郡誌という『嘘話』にも、書かれるべき必然性があった。和田長三郎末吉とは何者か。彼は修験（山伏）の家系につらなる者であった。秋田孝季も、その同伴者である和田長三郎古次も修験である。明治人・和田長三郎末吉は明治初期において、明治新政府による宗教弾圧に会う。特に修験者は徹底的にやられる。その弾圧に抗すべく書いた怨念の書が、外三郡誌の本質である」と（注二）。津輕での修験に対する宗教弾圧の実態がどれほどのものであったかは十分に明らかではないが、修験信仰の基盤が崩壊してゆく厳しい状況の中で、あたかも『古事記』や『日本書記』がそうであったように、和田・秋田の両家の正統性を誇示することをもくろんだのが『東日流外三郡誌』であったろう。その意味で、松田氏の指摘は、誤りではない。『東日流外三郡誌』は、和田長三郎・秋田孝季にとっての、いわば「モノガタリ」なのであったと言える。モノガタリは、「正統なカタリの世界から排除される部位にあって生きつづけている」（注三）という藤井貞和氏の「見とおし」は、古代の物語の発生を推定するのみならず、『外三郡誌』の成立にも底通している心帷なのであった。

二

「カタリゴト」とは、「各氏族にとって尊いフルゴトを語り継ぐべき、各氏族の出自を示す神々、英雄などに関する神聖な話」であったものが、「カタリ」の信仰性、事実性、直接体験性からの解放」により、「それが公開され、対社会的な話柄となった」というところに『物語』の成立」を認め、モノガタリ」の「モノ」は、『万葉集』などで「鬼」を「モノ」と訓んでいることから、その氏族にとっては崇拜する神であっても、大和朝廷などの対立する氏族にとっては「鬼」であり「祟りをなす神」なのであって、そこに「モノガタリ」の内実と発生とを窺お

うとする三谷栄一氏の一連の研究は、物語発生論の重要な指標となっていると同時に、特に「ヘモノガタリ」の「ヘモノ」について、抜き差しならぬ決定的な方向づけをなしたのである。むろん、『源氏物語』などの物語作品が「ヘカタリゴト」であるはずはない。『落窪物語』が冒頭表現に「今は昔」と据えたことで、「過去と現在とに断絶が介在」し、「新しい文学様式を自覚した」のであって、「既にカタリゴト以来の世界では決してない」と力説されていることから、そのあたりの三谷氏の意図は充分に理解できる（注四）。

しかし、その一方にあって、「モノという語」は「霊的存在をさしうる」のであって、「モノは、いつてみれば未開の思考のなかに、深々とさぐりとられなければならないものであるように想われる」と藤井貞和氏は説く。「ヘモノ」は、物語作品と決別などしていない、という主張である。「物語文学の基底にあるものはつねにモノガタリでありつづけているということもまた、いうまでもないことである」（注五）という藤井氏の見解は、物語作品が誕生するまでの「ヘモノ」と「ヘカタリ」との複雑なかかわりのプロセスを最大限に読み取ろうとする決意でもある。

それに対して、「物語」という熟語の初例である「靖角髪 依網原 人相鴨 石走 淡海県 物語為」（あをみづら依網の原に人も会はぬかも石走る近江県の物語せむ）（巻七―二八七）での「物語」なるものの内容は、「ヘカミンヘタマ」に対する『鬼』の意の「ヘモノ」の語りは記紀等の日本神話の主調とさえなっている。「ヘカタリゴト」とは異なるもので、「ヘモノガタリ」の「ヘモノ」は「霊魂の意と理解するわけには行かない」と三谷邦明氏は主張する。さらには、もう一つの「ものがたり」の用例とされている『万葉集』の人麻呂歌集の略体歌、「忘哉語 意遣 雖過不過 猶恋」（忘るやと物語りして心遣り過ぐせと過ぎずなほ恋ひにけり）（巻十二―二八四五）では、「他人と語るが故にヘモノ」が付されていると解釈すべきで、「即自的な関係を持たない語り」が「語」なのであって、「ヘモノガタリ」は対自的に対象化された「ヘカタリ」、つまり「ヘカタリ」の自立した形態なのである」と推断する（注六）。

物語の発生と成長のうえに「書くこと」が極めて重要な機能を果たしてきたことを解き続けてきた三谷邦明氏にとって、ここでの解釈は有り得べきことではある。しかし「ヘモノガタリ」の「ヘモノ」を、「ヘカタリゴト」の色彩の中で理解する意識が漂い、物語作品の側からする「ヘモノ」の意をいまだ少し明確に捉えきれない三谷栄一氏の把握と、全く「フルコト」と密着した領域を重ねもつとする藤井貞和氏の「ヘモノ」の理解に対して、三谷邦明氏の解釈は決定的な相違を示している。それは「ヘモノ」「ヘカタリ」のそれぞれの語に向けられた視座の違いでもあるが、それ以上に、「書かれたもの」として現前する「ヘモノガタリ」作品における「ヘカタリ」の実態に即して、それをどう説明しうるか、という姿勢の違いであるはずだ。

三

「物語」なるものの実態は、「ヘモノ+カタリ」の線上にあるのか、それとも「ヘモノガタリ」または「ヘモノガタリ」であって、「ヘモノ」あるいは「ヘカタリ」の原初的な意味を排除したところに自立しているのか、「物語」そのものについても、文献資料に徴するかぎり、必ずしも充分に判明しているわけではない。いずれにしても、現在の物語研究のレベルでは、右に述べてきたところがその最先端の見解であると言ってよからう。上からの視点と、下からの視点とによる違いとも言うべく、あるいは、信仰的・言霊的な呪縛と創作意識との間での振幅の差ともいうべき微妙な解釈の違いとして理解することもできよう。それにしても、物語作品は依然として現前する。「物語」は「天武朝以後につくられた言葉」（注七）とする三谷邦明氏の推論を即断することはできないが、あくまで作品に視座を据えながらも、遙か古代のカオスにどこまで分け入ることができるかという模索によつて拓けてくる視界こそが、物語作品を考察する上に有効な手段としてあり続けることは、従来の研究に徴しても明らかである。「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め……」と『近代秀歌』でいう定家歌論の骨子を持ち出すまでもなく、深層に根差した詞の発生と、その詞に盛られていく意味合いとのズレは、起こり得

て当然だからである。同時に、物語の成立した当時における記述者及びそれを取り巻く人々の実感と実態とを軽視するわけにはいかない。そうでなければ、実際に物語作品に即した「ヘカタリ」についての究明にも対応が困難になろう。

たとえば、例の『源氏物語』の「竹河」の冒頭を見てみよう。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿下にありける悪御達の、落ちとまり残りけるが間は語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞ゆるは、我よりも年の数つもありけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。

(小学館・日本古典文学全集五十五三頁)

ここでの「間は語りしおきたるは」「かの女どもの言ひけるは」との表現を伴った「大殿わたりにありける悪御達」というあきらかな実態を彷彿させる「語り」を、どう理解すればよいのであろうか。「光隠れたまひし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」(匂宮)、「そのころ、按察大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり」(紅梅)、「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」(橋姫)と続く流れの中にあつて、「竹河」の冒頭文の特異性については、古註以来さまざまに言及されている。「大殿わたり」「ひが事」などの解釈についてはさておき、「此発端紫式部か作と見せずよそ人のいへる事の様にかけり」と表現上の技巧と見る「細流抄」や、「むらさき式部か心なり此巻のはしめこゝまでさらにふしんをはるけかたき也是まては紫式部か我身はふかゝらぬことにしるせる詞とも也」と表現のレベルの問題と捉えつつも、突然の語り手の登場に不審をいだく宗祇の『源氏物語不審抄出』、さらには「此巻有説に紫式部か娘大式三位つくりそへたりといふまた有せつにひけくろのつかひ給ひけるふる女はうたちかかたりける事共を書たりといふ唯三位か作りたるか一定なるにや 紫のゆかりにも紫式部か筆つけたるあとのゆかりにもなるましかりけれども聞へたる事を書也と言也」という『花屋抄』(作者未詳)などのように、右の引用部分の表現は、大式三位作者説までを呼び込むことになる。

それは、戦後の源氏研究においても、「源氏の正伝とせず外伝の如く装った技巧か」としながら、「巻頭にこの断りを特記してある点は、単に技巧のみではなく、構想上にも、また作者にも関係する重要な問題を含むものと思われる」(日本古典全書、頭注)と、構想上の問題はともかくとしても、作者に関する疑問をも付説せざるをえない状況にあった。あくまでも「物語の中の人物の言動」であつて、「物語としての、ある種の効果を期待している一つの表現上の技法」(注八)という理解ではおさまらないものを、この場面での「悪御達」の「語り」は抱え込んでいるのである。

それでは、「竹河」冒頭での悪御達の「語り」とは、どのような質のものなのか。一つには「外伝」であること。例の「帚木」巻頭の草子地において「忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ」と記される語り手の語りも、光源氏のもとにいた女房という設定ではあるが、光源氏の正伝を物語る語り手ではない。語られる内容も正伝とは位相を異にしていた。それは、「交野の少将には、笑はれたまひけむかし」(帚木)、「いづれかはまことならむ」(竹河)と、いずれも語り手の批判的な言辞でくくられていることから明らかである。ただし、批判的な表現でくくる語り手は、正伝の語り手でも、外伝の語り手でもない。それぞれの巻の内容を語る独自の語り手なのである。このことは、「帚木」も「竹河」も「並びの巻」といわれている事とも関連があらう。いずれにしても、系統を異にする物語を導入するときに、それを語る語り手の姿が突如浮上するというところに、「語り」が、外伝であり、疎外される立場にある者の見聞した事柄であるという、「語り」が本来的に担っていたであろう意味合いが含まれていることに注意すべきである(注九)。

二つめには、当時の女房集団がすなわち語り手の集団でもあったということ。天喜三年(一〇五五)五月三日庚申の夜に、六条斎院様子内親王家で行われた『六条斎院家物語合』で、どのような形式で物語作品の優劣を競ったかは疑問が残るとしても、九番十八人による、十八篇もの自作の物語作品が女房達によって提出されたことが「題物語歌合」によって明らかとなっていることから、当時の

女房たちがどのような意識と情況のもとで物語の創作に向かっていたかを窺い知することは可能であろう。既に、物語の書き手は、同時に聞き手でもあることは言われていることだが、あらためて「作者と作品の読者の『近き』『親しき』」を強調する鈴木一雄氏の主張の重要性を思い起こしたい(注一〇)。「胡蝶」での、春の町の「船の楽」に招かれた秋好中宮付きの女房たちが、その感想を「昨日の女房たちも、『げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり』と花におれつつ聞こえあへり」(三一―一六四)と光源氏・紫の上の住む春の町を称賛している場面は、秋好中宮の女房の言動をとおして語らせることで、源氏に付き添う立場で語っている語り手とは別の語り手が瞬時に入り込む形になっているのである。「紫式部日記」や『枕草子』に記されているように、女房たちは仕えている主人にかかわって、あるいは日常の行動の場を中心として、さまざまな事柄を見聞している。鈴木氏の「題物語歌合」の「第一の特徴は、提出作品の多くが『五月』を意識していることであろう」との指摘も(注一一)、単に作品の提出時が五月三日であるという「季」の制約にとどまらず、物語の作成に際して実際の見聞に即した内容を描こうとする姿勢のあらわれとも受け取れる。言うまでもなく、日記作品においては、おのずとその態度が保たれている。そうしたことが、物語作品の創作においても、書き手の意識を捕捉していたのではないか。それぞれの女房の視界に見えている範囲内で語ること、「作者と作品の読者の『近き』『親しき』」があればあるほど、それは暗黙の了解となっていたものと思う。語り手の複雑な設定や、語り手の自由な変換が可能なのも、それぞれが語り手であり、かつ聞き手でもあるという、当時の女房たちの実態と実感に照らせば、なんら不都合なこととはなかったであろう。いわば、ある集団に属する女房たちのそれぞれが語り合う情況をそのまま作品に移行する形を採択したもの、それがここでの〈語り〉の実態と大きくかかわっているのではないか。

四

ところで、構築された物語作品として、あらためて「竹河」冒頭文の最後にあ

る「いづれかはまことならむ」、および「帚木」の「さるは、……交野の少将には、笑はれたまひけむかし」と語った語り手の位相を考えると、どのような理解が可能なのであろうか。

「竹河」では、「悪御達」の会話文を挟んで、「これは、……いづれかはまことならむ」と語る、「紫のゆかり」とも別の語り手が存在している。しかし、直後に続く「尚侍の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおはしけるを……」と語るのは、どこに属する語り手なのであろうか。「悪御達」の「問はず語り」と理解するか、あるいは、「悪御達」が「問はず語りしおきたる」ものを、別の語り手が代弁しているとすべきかのいずれかであることには違いない。『花鳥余情』に「此巻は勾兵部卿の巻には横の並なるへしたまひし此巻には十九のとしの秋やかに「秋よりは堅の並とあたれりといふへし」とあるように、巻の順序は「勾宮」「紅梅」「竹河」であるが、年立では、「竹河」は「勾宮」と並列し、「紅梅」は「竹河」最後の年の翌年に位置する。こうした状況についての諸説はここでは省くが、中納言(薫)についての記述も「竹河」にはあることから、「竹河」全体の語り手を「悪御達」とすることは、厳密に考えれば、問題がないわけでもない。それは、別の語り手が代弁したと考えるのも同じことである。しかし、そうした論理の整合性をそこに求めること自体が無理な注文なのである。

一方、「帚木」の冒頭であるが、「忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ」とある「語り伝へけむ人」(語り手)と、「交野の少将には、笑はれたまひけむかし」と批評する語り手との関係は、必ずしも明確ではない。「竹河」と同様に、その直後に「まだ少将などにもおしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて」と語り始めるのは、「隠ろへごと」を語り伝えた語り手であるとも推測される。ところが、「帚木」の冒頭と呼応する「夕顔」巻末の「作り事めきてとりなす人ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪避り所なく」と対応させてみれば明らかなように、ここまで語ってきた語り手は、「隠ろへごと」を語り伝えた語り手ではなく、その語りを聞いて、

「帯木」の冒頭から語り手が代弁していたことが判明するのである。だが「帯木」の冒頭では、それを十分に納得させうる記述にはなっていない。もともと語り手の位相が、それほど明確にされていないからである。

そこで、そうした語り全体を収斂する位置に「話者」という概念を設けて、最終的な語り手の働きを「話者」の機能として一括しようとする三谷邦明氏の説は（注一二）、そのあたりの混乱を整理し、実際の物語表現に即した形として把握しようとした試みである。しかし、それでは「話者」という新たな概念規定の位置付けが宙に浮いたものとなりはしないか。また、以上の現象について、高橋亨氏は「作者の陥穽したポーズであり、表現構造の多元的な重層化である」と解釈する。説得力に富む説明である。だが「語り」構造の重複を「作者の陥穽したポーズ」であると理解するだけで、はたしてよいのであろうか。どうもそのようには思われない。「作者」（記述者）が「陥穽したポーズ」を意識的に取っているのではなく、当時の女房集団の場に即応した形で自己主張であり、同時に話題の出処を示すという創作上の姿勢に忠実であったがための結果ではなかったか。また、「表現構造の多元的な重層化」とは、具体的にはどのような表現構造をいうのであろうか。「直接見聞者たちによって言い伝えられた物語を、〈語り〉の場の表現として対象化し〈書く〉構造が、幾重にも包みこまれ、複合されることによって、〈作者〉は直接見聞者から読者までの位相を、溶化し移行して表現の自由を獲得しようとする」（注一三）という氏の言説がその解答になろう。この氏の言説によって、草子地をも含んだ表現構造はほぼ説明されていよう。ただ、「〈語り〉の場の表現として対象化し〈書く〉構造が、幾重にも包みこまれ、複合される」とは、具体的にはどのような様相のものとして理解すればよいのかを見ておきたい。たとえば、今までに見てきた「竹河」の冒頭文は、これで説明しつくせるであろうか。「悪御達」「紫のゆかり」そして「いづれかはまことならむ」と語る語り手と、複数の語り手の実態が記されていることは確かである。けれども、ここでの語り手は、冒頭文においても、その直後に開始される物語の場面においても、いずれかの立場に身を置く語り手に限られていると見られないことも

ない。「かの女どもの言ひけるは」「などあやしがりける」と「いづれかはまことならむ」との記述の差からも、それは言えよう。「帯木」の冒頭においても、語り手は一人であった。その場で機能している語り手と、話題の出処となった語り手とを区別しようとしている意識が認められるからである。また、頻繁に記述される草子地は、「〈語り〉の場の表現として対象化して〈書く〉構造」という把握ではほぼ捕捉できているのだが、前後の文脈を語る「語り手」と同一人物でありながら、草子地の「語り手」のトーンが微妙に変化し、あたかも位相を異にする語り手が登場しているかのような印象を与える草子地の部分にこそ、「語り」の実態がほの見えていと言つてよい。

「語り」の表現構造に即応して三谷邦明氏は、具体的な入れ子型の図化を幾度か試みている。ここでは、最近の作図に従うと、「登場人物」を中にして「語り手」が囲み、それを「無限の私」が取り巻くという作品世界を認め、作品の境界は「話者」によって限られ、その「話者」という境界機能に付属して「私」という作用機能を置く、というものである。こうした作図の根拠は、「語り手も聞き手も不在な〈語り〉、つまり物語文学における〈語り〉の〈読み〉において、伝達の側面で現象するのは、結論から言えば、無限の語り手、つまり語りの拡散化である」との解釈にある（注一四）。物語の「語り」の質とさまざまな局面とを精査し、さらに「〈読み〉」に視点を据えたこの主張は説得的であり、氏の一連の「語り」の論考の中でも説明可能なギリギリのところまで言及されている。それを充分に承知した上で、「〈語り手〉」と「話者」との相連、また、その間に「無限の私」を置いて、「登場人物や語り手を批判的に相対化して行く読み手の眼差しを指示する」「読みそのものが『無限の私』なのである」とすることについては、なかなか納得しにくいところがある。むしろ「読み」は、語りの機能を帯びつつ記述されている物語世界そのものに向かうわけである。その意味では、作品世界の中に直接に読み手の眼差しが届くことになる。それでも、「無限の私」の設定はあまりにも「〈読み〉」に引きつけすぎた作品構造の理解にはならないだろうか。「無限の語り手、つまり語りの拡散化」とも受けとれるほどにさまざまな位相の

語り手が交錯する表現手段が用いられているわけだが、「語り手も聞きても不在な〈語り〉」とは、あくまでも読みの問題に中心をおいた見方としては理解できない。しかし、作品構造の分析には、極めて意欲的な発想ではあるけれども、必ずしも有効ではないように思う。「話者」や「無限の私」の概念規定とともに、その位置を確定することも決して固定的には考えられないからである。むしろ、「無限の私」なる「読み」そのものを作品構造の中に忍び込ませたことで、かえって作品構造を判りにくくしているように思われる。

五

記述者の実感に即した〈語り〉の構造を持ち込みながらも、それを「ヘカタリゴト」の次元とは決別した虚構の方法として巧みに用いることで、『源氏物語』は独自の作品世界を完成した。しかし、書き手が意図したほどには、〈語り〉という機能は、虚構手段としては自立していなかった。あるいは、書き手自身にも、〈語り〉を虚構手段として機能させる充分な意識と用意が成熟していなかったのかもしれない。

しかし、語り手（記述者）は同時に聞き手でもあったという「題物語歌合」から推定される当時の女房たちの実状を考慮すれば、論理的な判断に困難をきたすほどに〈語り〉の機能を駆使しようとした情況が彷彿とする。言うまでもなく、〈語り〉の問題は記述者の実状と実感とに即したリアリティのレベルと密接に関連しているのであって、そのひたすらな遂行が〈語り〉の空洞化をすら招いたということであろう。

〈モノガタリ〉の〈モノ〉がおのずから含み込んでいる遙かな古代性は軽視できない。しかし『源氏物語』に採択された〈語り〉は、『万葉集』の「近江県の物語せむ」「忘るやと物語して」などの用例に見られる用法と、従来言われているほどには隔っていないのではないか。さまざまに成果を重ねている〈語り〉論の極地から見れば、ここに述べてきた見方は甘すぎるとの批判もあろうが、ここでの意図は、結局は説明不能に陥るであろう〈語り〉の構造の徹底的な分析では

なく、〈語り〉の機能によって築き上げられた作品質への見通しであり、〈語り〉を持ち込むことで作品の創作に向った記述者の思惟を推定するための試論であった。

(注)

- 一、岩波・日本古典文学大系本による。
- 二、『東日流外三郡誌の謎』（津軽共和国文庫）一四四頁。
- 三、藤井貞和「物語の発生」（『体系物語文学史』第一巻所収。有精堂）
- 四、三谷栄一「物語文学とは何か」（注三同書所収）
- 五、注三同論文
- 六、三谷邦明「物語文学の成立」（注三同書所収）
- 七、注六同論文
- 八、阿部秋生「螢の巻の物語論」（『源氏物語の物語論——作り話と史実』所収。岩波書店）
- 九、三谷邦明氏は「源氏物語における〈語り〉の構造——〈話者〉と〈語り手〉あるいは「草子地」論批判のための序章」（『日本文学』一九七八年一月号）において、「〈語り手〉の言葉が多量に費されている諸巻は先行する巻に平行する時間を描いている傾向が強い」点を指摘されている。
- 一〇、鈴木一雄「物語文学の場——作者、作品、読者の「近さ」を中心に——」（『体系物語文学史』第二巻所収。有精堂）
- 一一、注一〇同論文
- 一二、注六同論文。三谷邦明氏は「話者」の概念と機能について、注九での論文以後、一貫して主張されており、その説明は詳細を極めていて示唆に富み、ここでの小生の言説などは一蹴されるほどの深い読みを支えられている。それを承知の上で、記述者の実際的な思惟のレベルと本文の自立との間で明確に飛躍できず、こだわって見たのだが、以後は氏の説かれるところに分け入って、考えを深めてみたい。
- 一三、高橋亨「物語の〈語り〉と〈書く〉こと」（『源氏物語の体位法』所収。東京大学出版会）
- 一四、注六同論文